



山形県

面積約9,500平方キロ。人口約120万人。蔵王や山山など日本百名山に名を連ねる山々に囲まれ、日本三大急流の一つである最上川が流れる。果樹栽培が盛んで、さくらんぼは全国の7割の生産量を占める。コメの生産量も全国で上位。1994年にインドネシア・パプア州と姉妹県州協定を締結し、農業や保健分野などの研修員受け入れ、日本語学習支援などを通じた交流を行っている。

できないコメ作りを

インドネシア・パプア州と姉妹県州協定を締結し、さまざまな形で友好関係を深めてきた山形県。現在は、国内有数のコメどころとしてのノウハウを生かし、コメ作りを支援している。そして今年4月、震災後間もない東北の地に研修員がやってきた。

山形県



田植え機に初めて乗ったという研修員のノファさん。長沼さん(中央)にアドバイスを受けながら「農作業の機械化はコメの収量増加に必要不可欠ですね」と話していた

日本が誇る 山形の稲作技術

4月中旬、長かった冬も終わり、新芽があちこちに顔を出し始めた山形県山形市。市内西部の山ぎわに位置する山形県農業総合研究センターでは、青々とした苗をいっばいに積み込んだ田植え機が、実験圃場を勢いよく進んでいた。

「ハンドルを真つすぐにね」

同センターの長沼億博さんの指導を受けながら、慣れない手つきでハンドルを操作しているのは、インドネシア・パプア州農業園芸局のノファ・サンゲナファさん。同じく農業園芸局の職員であるレンディ・ウエヤさん、ポナル・ドロクサリブさんとともに、4月中旬から山形のコメ作りの技術を学ぶために来日した。

「パプア州より50年は機械化が進んでいますね」

同州で導入されている農業機械は、簡易な刈り取り機や耕耘機のみ。3人は日本の田植え機の機能性に驚きを隠せない様子だった。

第二次世界大戦後、県出身の兵士の遺骨収集を行ったことがきっかけで、1994年に姉妹県州協定を締結した山形県とパプア州。以降、20年以上にわたり、さまざまな分野で人的・技術的な交流を図ってきた。そして2010年からは、JICAの草の根技術協力事業を通じて「パプア州水稲種子生産技術確立事業」を開始。毎年3人、パ

その土地にし



種子の発芽試験で一つ一つの芽を確認。「これは発芽してるね」とレンディさん

プア州農業園芸局の職員を研修員として受け入れている。山形県は、日本海側の庄内地方を中心に、国内有数のコメどころとして名高い。10アール当たりのコメの生産量は、長野県に次いで全国第二位を誇る。また、肥沃な土壌、昼夜の寒暖の差など山形の気候風土を生かした新品種の開発にも積極的に取り組み、「はえぬき」や「つや姫」など、高品質で味の良い水稲品種育成の実績も高く評価されてきた。

インドネシアの主食もコメ。政府の後押しを受けて、各地で稲作振興が進められている。中でもパプア州は南西部を中心に広大な耕作可能地域があり、コメの生産拡大のポテンシャルが高い。しかし、地域の特性に合った種子栽培の技術普及、灌漑施設や農業機械の導入などがなかなか進まず、収量が伸び悩んでいた。

そこで手を差し伸べたのが山形県。パプア州の稲作の発展に貢献すべく、長年の経験を通じて培った稲作技術を携え、地元の農業のプロフェッショナルたちが立ち上がった。

3年間で 稲作の全段階を学ぶ

1年目となる昨年は、9月中旬から1カ月半、コメの収穫期に研修を実施。収穫の実習に加え、種子の選別や検査、生育調査、種子圃場管理などのノウハウを伝えた。「毎年異なる時期に研修を

実施することで、稲作の各段階をトータルで学べるようにしています」と研修を担当している山形県農業総合研究センターの今田孝弘さんは話す。

そして今年も、種まきと田植えの時期、4月中旬から5月下旬にかけて研修が行われた。しかし、そのわずか1カ月前に東日本大震災が発生。インドネシアも日本と同様に地震大国。パプア州の人たちの「思い」を背負って来日した研修員たちは、「研修が延期になるかと思いましたが、山形の皆さんの力で来ることができた。日本の稲作の技術をしっかりと学んでパプアの稲作に生かしたい」と意気込んでいた。

約7週間、種まきから田植えまでのプロセスを体験した研修員たち。種子をどのように発芽させるか、異なる品種と混在しないようにどのように隔離させるか、実験室での密な作業にも根気強く取り組んだ。また、新品種開発の最先端をいくセンターの施設を見学し、「ビニールハウスの水は毎日やるのか」「気温が下がった時にはどのように温度管理をしているのか」など、積極的に質問を投げ掛けていた。

また、田植えの実習では、パプア州ではまだ導入されていない田植え機に試乗。初めての経験に最初は顔がこわばっていた女性の研修員ノファさんもその効率性を体感し「パプアでも導入したい」と満面の笑みを浮かべていた。山形県商工観光部の永井健さんは「日本の農業機械を体験してもらうことで、



[上] 皆で腰を曲げて田植え作業
[右] 田植え機に苗を設置する研修員たち



パプア州での機械化に弾みがつけば」と期待する。

3年目の研修は、稲穂が出た後の株の抜き取り作業などについて指導を行う予定。「技術はもちろんです、山形で農業に携わる人々の姿勢や考え方に触れ、自国の農業の参考にしてほしい」と永井さんは話す。

山形の農業を肌で感じた研修員たちの手によりパプア州の「ブランド米」が生み出され、一面に、黄金色の稲穂がなびく日もそう遠くはないはずだ。



山形県農業総合研究センターの今田さん(中央)から、発芽試験での判断基準について説明を受ける研修員たち